

(本年度、重点的に取り組む事柄)

【義務教育】生徒の主体性を基盤にして、学力の向上、豊かな人間性、健やかな心身の育成に向けた教育活動の展開
【教育研究】地域のニーズに応える教育研究の推進と、文部科学省の研究開発指定を受けた「ものづくり科」によるイノベーション人材育成に向けたカリキュラム開発
【教員養成】学生の教職への希望を高めることを目指した教職の良さを感じることができる教育実習の実施

自己評価（中間評価）		自己評価（年度評価）		学校関係者評価	
A	とても順調に進んでいる	A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	順調に進んでいる	B	達成できた	B	概ね適切である
C	あまり順調に進んでいない	C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	まったく進んでいない	D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
				E	判定できない

評価項目	具体的評価項目及び指標	自己評価（中間評価）		自己評価（年度評価）		学校関係者(学校運営協議会)評価		学校関係者(学校運営協議会)評価を踏まえた改善策	学校関係者評価を踏まえた改善策への対応状況
		評価	達成状況、改善策	評価	達成状況	評価	意見・理由		
<p>【義務教育を実施する学校として】</p> <p>生徒の主体性を基盤にして、学力の向上、豊かな人間性、健やかな心身の育成に向けた教育活動の展開</p> <p>1. 主体的な学びを通じた学力の向上</p> <p>2. 豊かな人間性の育成</p> <p>3. 健やかな心身の育成</p>	<p>1. 生徒が主体的に学ぶ授業実践を通して、生徒の自己評価アンケートで「授業を通して成長を感じた」項目での肯定的評価をした生徒の割合が90%以上</p> <p>2. 生徒会による自治的な活動を推進し、創造性ある活動を実践する。生徒アンケートで、「活動や体験を通して心の成長を感じた」の項目の肯定的評価の割合が90%以上</p> <p>3. 有効な運動機会（体育授業、遠足等の行事など）を増やすことで、全国体力・運動能力調査で学年毎の経年変化による合計ポイントが昨年度を上回る。</p>	B	<p>1. 全校の数値は87%であった。1年生は92%だが2・3年生で90%を下回った。学ぶ意欲と学ぶ価値を得られる授業実践を進める。今年度研究の推進が成果となると考える。</p> <p>2. 全校の数値は94%だった。すべての学年で高い数値となっている。生徒会の縦割り班での活動など、自己肯定感が高まる取組が多かったと考えられる。</p> <p>3. 体力・運動能力調査について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2年生は男女ともすべての種目において向上している。</li> <li>・3年生男子は、すべての種目において向上している。女子は2年生では、立ち幅跳び以外はほぼ持ち直している。</li> <li>・10月に遠足を企画し実行した。</li> </ul>	B	<p>1. 全体として、肯定的な評価の割合が90%を超えることができなかった。1年生では90%を超え、2年生はほぼ90%だったのに対して、3年生が83%ほどと低い数値となった。研究の重点が、生徒自身が自己の成長を強く感じる内容のものとは違っていたことも原因の一つかもしれない。</p> <p>2. 1年間を通して、90%以上の肯定的評価を得た。縦割り班による学年を超えた交流、同好会の設置など、新たな一歩を踏み出そうとする生徒の姿が顕著であった。</p> <p>3. 全国平均値以下であることから、今後も引き続き体力の向上を目指していかなければならない。行事としての運動会や遠足などでは、前向きにそして楽しく取り組む生徒の姿がほとんどである。引き続きその気持ちを大切にすることで、生涯に渡ってスポーツに親しんでいく素地作りは大切にしていきたい。</p>	B	<p>2. 学校行事の平日実施は理解できる。どのような形でも、参加できない人が一定数いる中で、学校の様子をどのように知ってもらおうか考えてほしい。</p> <p>3. 部活動がなくなった後、どのように変わっていったか動向を見守りたい。</p> <p>3. 運動だけでなく、生活習慣がどのようにになっているか、健康への意識はどのようにになっているかも評価に含むべきではないか。</p>	<p>1. 主体的な学びをこれまでと同様に大切にしたい。</p> <p>2. コロナ禍以来、小中連携の面で今一つ活動が充実していない面を今後の課題としていきたい。</p> <p>2. 学校の様子については、引き続き各種たより、HPへの掲載等で発信していく。</p> <p>3. 運動能力や体力面のみでなく、健康面の指標を設定し、健康教育の面を打ち出していく。</p>	
<p>【教育研究を推進する学校として】</p> <p>地域のニーズに応える教育研究の推進と、文部科学省の研究開発指定を受けた「ものづくり科」によるイノベーション人材育成に向けたカリキュラム開発</p> <p>1. 「ものづくり科」2年次におけるカリキュラム開発の推進</p> <p>2. 教育情勢や地域のニーズに応えた内容の研究協議会や講座の実施</p>	<p>1. 学校評価の職員アンケートでカリキュラム開発を計画通り推進することができた割合が80%以上</p> <p>2. 教育研究協議会について効果的な広報を行うことにより、前年度を上回る参加者数の獲得。また、教育研究協議会をはじめ公開授業や協議会、講座の参加者満足度が85%以上</p>	C	<p>1. 前期の職員評価では60%であった。職員同士で話し合う時間に限りがあり、納得できるまでの話し合いにならなかったという反省や、外部との連携や協力の体制をうまく構築できなかったという課題がある。</p> <p>2. 今後の研究会の成果を見て評価を行う。</p>	B	<p>1. 今年度は、特にカリキュラム開発を進展させる1年と校園で位置付けて取り組んだ。研究開発の進展とともに、どのような題材を基にした単元づくりを行ったらよいかなど、迷いが出てきて停滞気味である。そのためこのように低い評価となっている面がある。今後、研究開発部を中心にして、カリキュラム作りに取り組んでいきたい。</p> <p>2. 対面による公開授業と授業動画視聴の2本立てで行い、参加者は両方を合わせて489名となり、昨年度の人数(430名)を上回った。広報活動の回数を増やすことで対面の参加者を増やすことができた。参加者のアンケートでは、「今後の授業づくりの参考になったか」「今日の研究会に満足しているか」の項目について、ともに100%の方が肯定的な評価をしていた。また感想では、「授業づくりの視点をもらった」「自己のスキルアップに役立つ取組を知れた」など、自己の授業改善に活かそうだと述べるものが多かった。</p>	B	<p>1. 2. 研究協議会の充実や地域教育事務所との連携は確立されているように感じる。教育実習生からも学びが深いとの評価がある点は高く評価できる。一方で、ものづくり科については、研究成果を実践の質向上へと還元し、生徒の主体性や実感につながる授業設計としては、多くの企業人との触れあいの機会、意見交換の機会など幅広いものづくり科の可能性を感じてもらうことが必要である。</p>	<p>2. ものづくり科の実践の中で、これまで以上に実社会との結び付き、産官学一体となった取組を推進していく。</p>	

評価項目	具体的評価項目及び指標	自己評価（中間評価）		自己評価（年度評価）		学校関係者（学校運営協議会）評価		学校関係者（学校運営協議会）評価を踏まえた改善策	学校関係者評価を踏まえた改善策への対応状況
		評価	達成状況、改善策	評価	達成状況	評価	意見・理由		
<p>【教員養成を行う学校として】</p> <p>学生の教職への希望を高めることを目指した教職の良さを感じることができる教育実習の実施</p> <p>1. 実習生への実践につながる指導</p> <p>2. ICTを活用した実習プログラムの実施</p>	<p>1. 事前指導により実習生の不安を軽減し、成功体験により自己肯定感を高める。教育実習事後アンケートで、教職への意欲の高まりが見られる学生が80%以上</p> <p>2. 年間を通じた教育実習において、ICT機器を活用した授業実践を行った実習生の割合が80%以上</p>	A	<p>1. 回答した38名の学生のうち35名が事後アンケートでの満足度が高く、教職への関心を高めることができた。事前指導で指導担当教諭と直接話し合う機会があったこともスタートのハードルを下げていたようである。また、へき地校への見学は学校教育の多様な面を見れることで刺激を受けた学生が多かった。</p> <p>2. すべての学生が何らかのICT機器を活用して授業実践を行った。ク롬ブックの操作を学ぶよりも、自分で普段使用している機器の方が扱いやすいという学生もいた。</p>	A	<p>事後のアンケートでは、「実習に対する満足度」「実習を通じた自己の成長」を感じた割合は89%であった。その背景には、90%の実習生が実感した「教員という職業への理解」の促進があると思われる。また、事前では11%しかなかった協働的な学習を実践する自信は、実習を通して68%まで上昇した。結果として、ほとんどの実習生が教員という職業への理解を深め、教職への意欲や関心を高めることができた。</p> <p>この実習の中では、数年来継続している僻地・複式学校への訪問を実施した。小千谷市や魚沼市の中山間地への学校訪問は、附属学校園とは違った特色がみられ、実習生には大変好評であり、多くの学びがあったと述べられていた。</p>	A	<p>・実習生の成長の高まりや満足度の高さから、申し分ない内容であると感じる。</p> <p>・僻地・複式学校への訪問は、多様な教育環境への適応力を養う実践的機会として高く評価できる。教科指導だけでなく、学級経営や地域連携の視点を体得でき、理論と現場を結ぶ教員養成として意義ある取組なので、さらに実施の幅を広くしてほしい。</p>	<p>・へき地複式学校への訪問を継続して取り組んでいく。</p>	